

「公正さ」を保つことが ニュースの信頼性を担保する



現在、法政大学でメディア社会学科の教授として教鞭をとる藤代裕之さんは、地元の地方紙記者を皮切りに、ネットメディア、そして研究・執筆の世界を歩んでこられた。詳細は本文に譲るが、社会構造の変化や技術革新とともに大きく変化してきたメディアの姿を冷静な目で観察してきた方である。でも、世の中が変わると感じ、その大きな渦の中に飛び込みたいと、ためらうことなく転職する。新しいものの好きで好奇心旺盛。やはり中身は熱いのだ。

(本紙主幹・奥田芳恵)

「公務員みたいな仕事は 合わない」と言われ 新聞記者の道へ

奥田 藤代さんは、そのキャリアを徳島新聞でスタートされていますが、もともとジャーナリスト志望だったのですか。

藤代 いいえ。実は街づくりに興味があり、鉄道会社に就職したかったんです。ただ、大学時代にNHKの広島放送局でアルバイトをしていたので、当時のマスメディアの雰囲気はよくわかって

いました。

奥田 NHKではどんな仕事を？

藤代 「テロップバイト」といって、ニュース番組で表示されるテロップを、パソコンを使って入力する仕事です。テロップバイトに欠員が出たので、別のアルバイトをしていた大学の先輩が「藤代君はパソコンできるよね」と誘ってくれたのです。1990年代の初めはまだパソコンは一般的ではなかったため、高校の頃からパソコンをいじっていて、タイピングが速かった私に白羽の矢が立ったようです。

奥田 当時のメディアの雰囲気は、どのようなも

のだったのでしょうか。

藤代 記者は夜討ち朝駆けが当たり前で、職場はたばこの煙でもうもうとし、しょっちゅう上司の怒鳴り声が聞こえてくるような、今思えば非人間的な職場でした。でも、記者の人からいろいろな話を聞くことができたり、ときには食事をごちそうしてくれるなど、まだ牧歌的な部分も残っていたので、仕事自体は楽しかったですね。

奥田 まさに、ドラマに出てくるような少し昔のメディアの現場だったのですね。

藤代 ただ、時間との闘いもあり、だいぶ荒っぽい世界なので、面白そうだけど自分には無理だ



PROFILE 1973年、徳島県生まれ。広島大学文学部哲学科卒業。立教大学社会デザイン研究科前期課程修了。96年、徳島新聞社入社。2005年、エヌ・ティ・ティレゾナント（現NTTドコモ）入社。13年、法政大学社会学部准教授。20年、同教授。この間、関西大学総合情報学部特任教授、法政大学大学院メディア環境設計研究所所長、同社会学研究科長なども務める。著書に『ネットメディア覇権戦争』（光文社）、編著書に『フェイクニュースの生態系』（青弓社）、『アフターソーシャルメディア 多すぎる情報といかに付き合うか』（日経BP）などがある。

構成／小林茂樹
text by Shigeki Kobayashi
撮影／長谷川博一
photo by Hirokazu Hasegawa
2026.8.3／東京都千代田区のBCNにて

大切にしている2冊の本

社会部の若手記者時代に、他社の先輩記者からもらった『支店長はなぜ死んだか』（上前淳一郎・文春文庫）と『誤報』（後藤文康・岩波新書）の2冊。いずれも報道のあり方を問う内容で、藤代さんは記者の影響力や報道の大切さについてこれらの本から学んだという。今でも研究室の本棚に置いているそうだ。



と、そのときは思っていました。

奥田 それがなぜ、徳島新聞の記者に？

藤代 親が地元企業を受けてくれというので、徳島新聞も受けたのです。メディア企業はここしか受けていません。

実は、第1志望の鉄道会社にも合格していてそこに入社するつもりだったのですが、ある幼なじみから「鉄道会社って役所みたいのところだろう。藤代に公務員みたいな仕事は合わないんじゃないか」と言われて、なるほどそうかと。

奥田 お友だちの一言がきっかけで、方向転換されたわけですね。ところで、小さな頃はどんなお子さんだったのでしょうか。

藤代 幼稚園の頃は、電車やバスの運転手になりましたかったですね。

奥田 やっぱり（笑）。でも、大学は哲学科に進まれているんですね。

藤代 小学校の頃は、国語や社会科の勉強で苦労したことはなく、とても本が好きで、学校の図書室の本はほぼ読み尽くしました。そして高校に入ると、倫理・政経の先生が「知識が増えていくと、分からないことが増える」という話をしてくれて、それにとても納得したんですね。そのパラドックスが面白いと。それで大学は哲学科に進むことにしたのです。

奥田 いくら学んでも分からないことが増えるということは、学びはいつまでも終わらないですね。

藤代 終わらないです。むしろ、新たに分からないことが出てくることが面白い、ということだと思います。だから、高校の先生にはいい発想の転換をさせてもらったと感謝していますし、今でもそれが自分の考え方の根幹にあります。

他社の先輩から学び 一人前の記者に

奥田 そして徳島新聞に入社されるわけですが、初めはどんな状況でしたか。

藤代 とくに研修らしい研修もなく、事件や事故、裁判を担当する社会部に配属され、すぐ現場に出されました。

奥田 BCNにも地方紙出身の記者が何人かいるのですが、みんな同じように、取材をしにすぐ外に出たと言っていました。

藤代 そうでしょうね（笑）。現場で勉強してこいと、いきなり送り出されます。自社の上司や先輩には聞きにくいので、現場で他社の先輩にいろいろと聞くんです。もちろん教えてくれないこともあります。だいたい面倒を見てもらいました。初めはポンコツだったのですが、そういうライバル社の記者や取材先の人に助けられて、何とか一人前になったというところですよ。

奥田 新聞記者として心掛けていたこと、大事にしていたことはありますか。

藤代 ニュースを扱う上で私が大事にしていたのは「公正さ」ですね。

奥田 あえて公正さを意識する理由は、どんなところにあるのでしょうか。

藤代 記者という仕事には、ビジネスとして誰かの代わりに取材して伝えるという構造があります。だから信頼性を担保するためには、えこひいきがあってはならないわけです。つまり、長く書き続けるためには、インディペンデントな立場で公正さを保つことが必要だということですね。

奥田 最初から、そういう意識を持たれていたのですか。

藤代 3、4年、記者の仕事をして分かったことですね。例えば警察に詰めて取材する場合、警察官たちは使命感で動いているものの、組織において不祥事も起こったりします。そこであまりに警察に寄り添ってしまうと、悪いことは書かない単なる御用メディアになってしまうわけです。そこで「藤代君なら書くだらうね」と相手に思わせるような緊張感のあるスタンスを取ろうと思いました。

奥田 なかなかバランスをとるのが難しいです

ね。

藤代 少しずるいようですが、「特オチ」（他社が報道しているのに自社だけが情報をつかめず報道が遅れる状態）は避けたいが、取材相手には媚びない、自分を保ちながら会社の求める仕事にもきちんと対応する、といったことをいつも考えていましたね。

奥田 自分が書きたいことを書くためには、そうした工夫も求められるのですね。

藤代 入社2年目の97年秋、当時の四大証券の一角、山一証券が自主廃業したのですが、日本経済新聞が週末にそれを報道したことを受けて、私は山一の徳島支店の前でずっと張り込みをしていました。すると、みんな、まさか潰れるとは思っておらず、値を下げた自社株を客に勧めていたり、社員も自ら買っていたりしていたんです。もちろん、その株は紙くずになりました。

奥田 みんな思いもしなかったことが起きたのですね。混乱が想像されます。

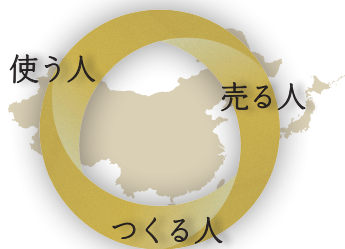
藤代 そして、週明けに店を開き、怒った客に頭を下げているのは、入社1、2年目の若い社員ばかりで、支店長などのお偉いさんは姿を見せませんでした。何の責任もない若い社員が、上層部の尻拭いをさせられていたのです。

この光景を見て、一つ間違えば自分も同じ立場だなと思いました。記者の仕事は面白かったのですが、組織に対しては一種の距離感を抱くようになったのです。

奥田 後編では、その後の藤代さんの決断と、大きな変化を見せてきたマスメディアの状況についてうかがいます。

（つづく）

BCNは「ものづくりの環」を支え
育むメディア企業です



——「ものづくりの環」の詩——

ものを使う人がいます
ものを売る人がいます
ものをつくる人がいます

いつの時代も私たちは生活の心地よさを求めます
その意（おもい）が新しいものを生みます

使う人、売る人、つくる人——
私たちは「ものづくりの環」のなかで
すべての人の心が豊かになることを願っています

株式会社 BCN
http://www.bcn.co.jp/